

架け橋賞/Cross Cultural Leadership Prize

Saki Tanaka (原文英語)

My Life as a Japanese-Filipino Child: Best of Both Worlds

私の名前はタナカサキです。日本人としてフィリピン人としての26年間の人生は、エキサイティングな旅のようでした。ですので、私は、日本にいるほかのジャパニーズ・フィリピン・チルドレンと私の経験を分かち合うことによって、よい励ましや教訓を与え、彼らが自分自身と日比の文化を尊重し、愛することができるようになれば、と望んでいます。そして彼らが日本とフィリピンの社会に貢献できるようになればと思います。

私の文化遺産

日本とフィリピンの半分ずつを受けついでいることは、素敵な文化遺産を受け継いでいることになります。すべては、日本人の父シゲトシと、母のジュリエットが愛の華を咲かせたことから始まります。二人をつないだものは音楽でした。母はクラブやカラオケバーでプロの歌手として働いていました。そして、父はドリフターズという有名なジャズバンドのトランペット奏者でした。

文化も宗教的な背景もまったくちがう二人なので、さまざまな文化の壁がありました。フィリピンのつつしみ深く、古風な気質を持っていた母は、彼を立てていました。しかし未来の家族のために問題を解決しようとしたが、母の仕事と世間のステレオタイプのフィリピン人のイメージのため、母は苦労しました。

彼女がフィリピンに帰ったとき、父は愛を証明するため、母を追いかけていき、母だけでなく家族にも愛を示しました。あらゆる反対を押し切って、その前に立ちほだかる幾多の苦難を乗り越えさせたのは、二人の永遠の愛でした。そして、ふたりは結婚しました。

家族との日々

二人は結婚生活の中で、長女の私の他に4人の子どもに恵まれました。そこには私たちの成長にも大きな影響を与えた二人の文化的譲り合いとその決意がありました。私の母は、すでに日本の文化に適応していました。仏教徒になり、習慣も考えも日本スタイルをとり入れました。

母は、父に話しかけるとき、日本語を使いました。しかし私たち子どもに話しかけるときは、タカログ語と日本語でした。日本では、父はできるだけ日本語を使いました。私たちに正しい日本語を学ばせたかったからです。そのおかげで私たちは日本で楽しい生活を送ることができました。父は、家で日本の料理をつくってくれました。私はそのおかげで日本食好きになりました。父はいいました。

「料理は勝負なんだよ。温かくて新鮮なうちに出さないと、もとの味が失われてしまうからね。でも、いちばん大切なのは、心を込めることだ。それが一番の秘伝のレシピだよ」

料理が上手な上、彼はサムライのように、規律正しい人でした。例えば、料理への感謝を表して、食事の前には「いただきます」といい、後には「ごちそうさまでした」ということなど、私たちに教えました。

私の母は、典型的なフィリピン人です。彼女にとって、一番の関心事は、家族です。

母はほがらかで、話しやすい人です。そして、おおらかな性格です。ときどき母は父に「食事中は、口をあけないように」「ゆっくりのんびりやらないで」と文句をいわれたりもしました。母は、体は小さいけれど力はあるという意味で、「小さくて怖い人」です。その一方で、母は、いつも何かを心配しています。いつも「家についてすぐに顔を洗ってはいけないよ」といいます。母は、そうすると病気になるという迷信を信じているためです。

日本のよいところをあげるなら、規律正しくて、責任感があって、働き者、そしておいしい食べ物です。フィリピンのよいところは、もてなしの心、年上を敬う事、家族を大事にする事、創造力、柔軟性があるところと、そして、男女が平等に扱われる事です。日本では、男子がすぐれているように扱われ、考えを共有することができません。とくに、今、仕事の上では、差別があると感じます。

二つの文化のはざまでの努力

私は、若くして二つの世界で生きる苦労を体験しました。私は、春の雨を受けて数日でおれてしまう桜のようでした。けれど、二つの文化をもつ子どもとしての私の経験は、愛によって祝福を受け、辛いときを超えて、私の名前のように、花咲きました。

父は事故によって、指にけがを負い、二度とトランペットを演奏することができなくなりました。音楽を職業とすることをあきらめ、

フィリピンで建設会社を興しました。父の新しい仕事にともない、私が3歳のとき、マニラに移りました。

私が小学4年生のとき、事件が起こり、私の人生と父のフィリピンに対する見方は大きくかわりました。その日、私が学校から家に帰ると、警察が 私たちの電化製品や、時計、宝石、そのほかの貴重品を運び出していました。何か家に困ったことが起きたとは思いましたが、そのときの状況を完全に理解するにはまだ幼すぎました。

父は、数人の不誠実な従業員たちにより、無実の罪を着せられたのです。父は刑務所に送られ、数か月をその中で過ごしました。

私たちの身を案じて、両親は、私と二人のきょうだいを日本に帰国させることにしました。自分たちの事業と従業員の生活、その家族のため、母はフィリピンに残り、末の弟、ムネトシを出産しました。

苦しい別れでした。まだ幼いともいえる12歳の少女が父と父の国で暮らすことになりました。私の人生のなかでもこの時期の経験は、ジャパニーズ・フィリピーノとしての考えに大きな影響を与えました。フィリピンで子ども時代をすごした私は、それから日本の文化、生活習慣に適応していかねばなりませんでした。

日本の中学に通っていたときは、もっとも適応を迫られたときでした。最初、私は学校のなかで注目を集めた人間でした。ほかの生徒にとってなじみのない、別の文化圏から来た存在だったからです。日本語になまりがあることで、リーダー的存在の女子生徒たちからいじめられたことを記憶しています。私は彼女たちを責めることはできません。教師の質問に答えるときも、教科書を読むときもいつでも、私の発音は少し違っていたからです。漢字には、いろんな読み方があったからでした。

私はわざとほかの日本人のようにふるまおうとはせず、英語で話しました。日本の習慣に倣って謝ることもしませんでした。彼らは、私の外見が日本人と同じであっても「ガイジン」（ガイコクジンの短縮形）として、私を扱いました。彼らは、私を不快なあだ名で呼び、私は独りで泣いたり、独りでお弁当を食べたりしました。父がつくってくれたお弁当は、私をなぐさめてくれました。お弁当は、父の愛情だったからです。お弁当はいつも私の一日の支えで、中学・高校生活を通して、その習慣は続きました。

しかし、ある日、私は、音楽を通して、怖くておびえる気持ちを乗り越えられることに気づきました。私は昼休みの時間、牛乳を飲

まないクラスメイトのための歌を考えました。有名なアニメ、「犬夜叉」の主題歌で、韓国の歌手 BOA が歌った曲、「Every Heart みんなの気持ち」をもとに考えたものです。私は自分が考えた替え歌を聞かせました。「メグメグミルクはおいしいよ。飲んだらきっと強くなれるよ」。

私はうれしくなりました。クラスメイトが牛乳を飲んだだけでなく、私は歌が上手なことを、ほかのクラスメイトに知ってもらえたからです。

遠足や旅行があると、クラスメイトたちは、いつも私に歌うように言いました。以前は私をいじめていたリーダー的な存在の女の子も、親しくなり、グループの輪に入れてくれるようになりました。両親から受け継いだ、歌への強い思いによって、私は学校へ受け入れられるようになりました。

この経験から、私はそれまでにない努力をしました。日本語を集中的に勉強し、さまざまなスピーチやエッセイのコンテストに応募しました。自分の自叙伝を書き、それは小さな本として出版されました。弟、妹たちにとって私はよい先生であり、私はよく勉強をしました。私を励ましてくれたのは父です。父は、私の能力を、いつも厳しく評価していました。だから、私は自分の本当の力を見せ、父は私を誇りに思っていました。

しかし、私はより高いところを目指す私の気持ちを止めることはできませんでした。高校を卒業した後、私は、週末、1日8時間、化粧品会社の工場のラインで働きました。またハンバーガーショップでも働きました。二つの仕事から私は貯金をして、自分でも払える授業料の安い短期大学で勉強しました。そこで英語教師の資格を取り、そして、学生のリーダーに選ばれました。私は、日本語を上達させるために一生懸命勉強し、大学の授業でもよい成績を修められるよう努力をしました。

大学を卒業したあと、私は就職しましたが、仕事はおもしろく思えませんでした。なぜなら、私は人にかかわる仕事につきたかったのです。そして、私は、さらに高い目標のために、フィリピンの大学に入学する試験を受け、合格しました。

私はもう一度学生生活をすることを決意しました。英語を専攻し、初等教育について学びました。

私はフィリピンの文化のなかで育っていたため、また母方の家族もいたので、適応することは難しくありませんでした。

しかしながら、大学2年生のとき、経済的な事情で勉強を中断しなくてはならなくなりました。私は日本に戻り、高校の補助教員として働き、その一方でフィリピンの大学のオンライン講座を受講しました。2013年、私は学士号を取ってフィリピンの大学を卒業し、それから仕事のキャリアを積み、家族を助けるために日本へ戻りました。

JFCの仲間たちへの励ましの言葉

「あなたの故郷は日本とフィリピンのどっちだと思いますか？」と人から聞かれるとき、私は、二つのうちどっちが私の本当の故郷か答えることができません。私にとっては家族がいるところこそが、故郷だと感じます。

日本は私が生まれ、そして今、働いているところです。しかし、フィリピンもまた私の国です。私はフィリピン人との間に違和感を持つことはありません。大人になった今、私は好きなときに、二つの国を行き来できる環境にあります。二つの国に友達のネットワークもあります。

私のように文化的なアイデンティティのはざまにいる人たちにとって、大切なのは、二つの世界の一部として自分を受け止めることです。私達の経験は、他の人たちとは違うかもしれませんが、自尊心や自分の信念を犠牲にする必要はありません。ジャパニーズ・フィリピン・チルドレンの仲間たちに伝えたいのは、自分自身と文化的なルーツを愛せよ、ということです。なぜなら、ほかのだれも、あなた以上に、あなたのことを的確に評価できる人はいないからです。もし、困難があなたの上におそいかかっても、あきらめることはありません。あなたがもっと自分を磨こうと努力すれば、ほかの人たちはあなたを認めてくれるようになります。

こんな言葉があります。「見たいと思う世界の変化にあなた自身がなりなさい」。その言葉は、二つの世界から最高のものを得ることができると示してもいます。

JFC ネットワーク賞/JFC Network Prize

Kenji B. Yutani (原文 英語)

「私たちを父と息子たらしめるのは、肉体や血によってではなく心によってだ」 —Johann Schiller

私の人生は、私の母と父が休暇を楽しんだ、フィリピンの片田舎で始まります。私は、カランポン ビラック カタンドゥアネス (Calampong Virac, Catanduanes) で育ちました。祖母、祖父、おば、おじ、そしてほかの親戚の愛情を受けて育ちました。

私は、ふつうの家と同じように両親に育てられることはありませんでした。一度、私は祖母にたずねました。「パパはどこ？ どうして学校が終わると、ほかのクラスメイトのところには、パパが迎えにくるのに、ぼくのところは、おばあちゃんやおじいちゃんが来るの？」祖母は私に、ママとパパは私によい暮らしをさせるために日本で働いているのだ、彼らがお金を送ってくれるおかげで、お前が学校に行けているのだよ、と答えました。

私は祖母が言ったことを信じ、二度とたずねることはありませんでした。でも、私が成長するにつれ、私の家族はもう私に事実を隠すことはできなくなりました。母だけがいつも私の誕生日や表彰式や、卒業式のたびに帰ってきてくれたからです。私は、もう一度父のことをたずねました。

祖父母は、私がフィリピンで生まれ、生後2か月の時、父は私を見捨てたことを話してくれました。正直に言って、そのときの私は、傷つきはしませんでした。母、そしてとりわけ祖母、祖父の愛情で心が満たされていたからです。私の人生から誰かが消えたとは感じないくらいでした。でも、心の底では、自分に命を与えてくれた男性にいつか会いたいと思いました。

私は成長し、いろいろな点で自分が特別で人と違うことを理解するようになりました。

私は公立のビラック ピロット (Virac Pilot) 小学校で勉強しました。クラスメイトはいつも私がみんなと違うといい、私は日本人とのハーフなのだと話していました。クラスメイトと先生は、いつも

私が恵まれているといいました。そのとき、私はいつも心のなかではこう思っていました。「みんな、自分たちがぼくより恵まれていることを知らないんだ。みんな父親がいるのに、家族がそろっているのに。子どもとして当たり前前に愛情を受けているのに」

私は政府が運営しているカタンデュアネス州立大学ラボラトリーハイスクール (Catanduanes State Colleges Laboratory High School) で中等教育を終えました。そして、私はマニラに移りました。ファーイースタン (Far Eastern) 大学に入学するためです。

マニラは私の国でもっとも発展した都市ですが、日本人の外見を持っていることは、少しも有利には働きませんでした。私は、誘拐やひったくり、犯罪の被害にあいやすく、一人でいるときや公共交通機関を使うときは、とても注意深くしていなければなりませんでした。

大学での最初の日を振り返ってみたいと思います。先生と学生が教室の前で自己紹介をしなければなりませんでした。私が自己紹介をすると、聞かれました。「どうして目が細いの?」「どうして君の名前はみんなと違うの?」「日本人なの?」

私はいつも自分が日本人とのハーフであること、父親から捨てられたことを話します。私がそんな話をする一瞬、周囲は沈黙します。

母が再婚を考えているという話を聞いたとき、私ははじめ、反対しました。それはもちろん、母と父がもう一度一緒になって、ふつうの家族のように、私たち親子が暮らせたなら、と夢みていたからです。でも、再婚は母の幸せのためにするものであって、僕のためではありません。2005年、母は義理のお父さんとなる人と結婚しました。やはり母のことを気にかけてくれる人が必要でした。母が悲しいのはぼくも嫌です。

義理のお父さんはぼくのことを他人として扱うだろうと思っていました。でも、違いました。彼は僕に洋服を送ってくれたり、有名な学校に息子を通わせようとする母を支援してくれたりしました。何よりも大切にしたいのは、彼が自分と血や肉を分けた息子のように、僕を愛してくれたことです。私は彼に永遠に感謝しつづけるでしょう。自分と血縁関係のない者を受け入れ、愛するには、相当な

覚悟が必要だったはずです。私は彼を「ダディ」と呼んでいます。

大学を卒業するとき私は母校から、マグナ クム ロードという優秀な学生へ送られる賞、つまり、観光専攻の商業学士の中でも学年2番の成績を称える賞を贈られました。私をここまで導いてくれた神とあらゆる形で支えてくれた両親に感謝しました。試験のたびに彼らはベストをつくせと励ましてくれました。

私は、たとえ家庭に恵まれなかったとしても、成功できないわけではない、むしろ、周囲の励ましや、自らを鼓舞することが大切だと、みんなに証明してみせたのです。

卒業したあと、私は、観光産業で仕事をするのを楽しみにしていました。しかし、突然、私は「日のいずる国 日本」を見てみたいという自分があることに気づきました。父に会いたいという気持ちもありました。私は父に会い、抱きしめたかったのです。そのまま良い仕事が見つかるかもしれないチャンスを捨て、フィリピンを離れる決断をするのは簡単なことではありませんでした。母とダディは私の考えに同意し、すぐにビザの手配をしてくれました。幸運なことに、日本政府は、私に3か月滞在可能なビザを出してくれました。3ヶ月のうちに父を見つけないと思いません。

初めて日本に着陸したとき、私は、育ってきた国とまったくちがうことにびっくりしました。そこにいた人々はまるで私のように細かい目をしています。最初、私は、ここに適応することは簡単なことに思いました。しかし、後でむしろ大変だと気づきました。

私は、東京の小さなアパートで母とダディと一しょに暮さなければなりません。ダディは日本人男性としての伝統的なふるまい方をしていて、それに慣れるのは大変でした。私はすべてを変えなければなりません。挨拶にはじまり、食べ物の買い方、電車の乗り方、いつ眠って、いつ起きるのか、時間を重んじること。

いちばん大変だったのは、日本語をまったく話せないことでした。私は日本語の基礎知識を持たずに来ました。電車やスーパーマーケットでの人々の会話、テレビの芸能人の言っていることもわからずにいました。私のように初めて見るものには、とてもストレスを感じさせるものでした。

許可された滞在期間が終わりに近づいたころ、私と母はどうしたらいいかわからず、とてもストレスを感じていました。幸いなことに、インターネットで、特定非営利活動法人 JFC ネットワークを発見しました。すぐに私の相談を受理してくれ、私の実の父親さがしを始めてくれました。

それは、とてもつらい時期でした。なぜなら、私は本当のことを知るために、パパとママの間に起きたあらゆることを思い出さなければならなかったからです。

父親さがしをしながら JFC ネットワークは、私が日本人の配偶者等のビザで、1年間の在留資格をとれるように手助けしてくれました。私はとても幸せで恵まれていると思いました。少なくとも、日本で権利の一部を得ることができたのです。でも、少し悲しいこともありました。日本人の子である私には日本政府から日本国籍を得るチャンスがあったのですが、それには、私が日本に来るのが遅すぎました。私のようなケースは、「国籍喪失ケース」(訳注：婚内子として海外で出生した子は、出生から3カ月以内に日本大使館へ「国籍留保届」を提出しないと、日本国籍を喪失する)をといいます。

政府がビザを発給したので、私は、就労することができるようになりました。私は品川区のフィリピン人コミュニティの人たちの助けを借りて、仕事さがしを始めました。幸いなことに、ワイン工場を紹介してもらいました。私はブルーカラーの仕事の経験がまるでなかったので、大変だろうなということはわかっていました。最初の日、私が運ばなければならないワインの箱が山のようにありました。1箱21キロあります。私はそれを超特急でコンベアーに置いていかなければなりませんでした。それに、私の上司はあまり私のことをよく扱ってくれませんでした。彼は私のことを名前ではなく「デブ」と呼びました。

私の体重のことで、いやがらせ、いじめを受けた、おそろしい経験でした。きつい業務や言葉の壁にめげず、私は気丈に立っていました。でも、でも心の中は泣きたくて、投げ出したい気持ちでした。そのとき私は、父が見つかるまでの辛抱だと自分に言い聞かせました。

不運なことに、私は働き始めて14日間で監督から解雇されました。彼が私を解雇したのは、私がただフィリピン人だから、そしてフィ

リピン人とは働きたくないからという理由でした。差別を受けていると感じました。それからすぐに私は別の仕事を見つけました。今度はクリーニング工場の仕事で、従業員はみんなフィリピン人でした。それもまた、きつい仕事でしたが、少なくとも差別を受けることはありませんでした。

2013年の3月中旬、JFC ネットワークは電話で私により知らせを伝えてくれました。父が見つかったというのです。7か月間待ち、ついに私は彼に会えることになりました。でも悪い知らせも聞きました。父は病気で近い将来、目が見えなくなるかもしれない、だから、少しでも早く私に会いたいのだそうです。

そのとき、私は泣きました。私の父親さがしの旅はもうすぐ終わりを迎えることができる。でも、彼が自分の目で僕を見ることができるときに会わなくては。

私は神に私たちが会う機会を与えてくれるように祈りました。JFC ネットワークのスタッフにつきそわれて、私は新幹線に乗り、父の暮す場所に向かいました。そのときの気持ちをなんと言っているのかわかりません。どれだけ、興奮し、緊張し、幸せだったことか。私の父親がどんな反応をするのかわかりませんでした。5時間かけて、私たちはとうとう私の父が待っている駅に着きました。スタッフの名前を確認しながら、こちらに来る一人の男性を見ました。彼はすぐに私たちこそが自分が待っていた人だと確認しました。

彼はすぐに私を抱きしめ「ごめん、ごめん、ごめん！」と言いました。

それは、私の人生のなかでいちばん忘れがたい日でした。私の命を与えてくれた男性から、抱きしめられたことを、私は信じられませんでした。

私たちはそこで父の50歳の誕生日を祝いました。初めて一緒に夕飯をとったとき、私は涙の川ができるくらい泣きました。私は長いときを経て、かつて私の養育を放棄した父が用意した心のこもった夕食を食べることができたのです。十分、彼の愛を感じることができました。私たちはとても良い時間を過ごすことができ、それから初めて銭湯に行きました。公衆の浴槽のなかで、父は私にこれまでのすべてのことを説明しました。彼は私のことを忘れていませんでしたし、私に会いたいと切望していました。しかし、どうやって、

何から始めたらいいかわからなかったのです。私は「もういいよ」と言いました。ただこの瞬間を大事にしたかったのです。私は彼に「もう過ぎたことは忘れてほしい」と言いました。そして、彼も私たちの新しい関係をはじめようと言いました。そのとき、私はもう二度とはなればなれにならないようにと願いました。

私はこう思います。親を選ぶことはできません。私たちの選択肢はひとつだけ、親を愛すること、敬うこと、そして親から学ぶことです。今も私は、ここ日本にいます。私は日本でもっとも有名な英会話スクールで英会話の講師をしています。私は日本にすることを選びました。なぜなら、またいつか父の暮す場所に戻って、少しずつ父と私の間にある溝を埋めていきたいからです。もっとお互いのことを知って、もっと忘れがたい思い出をつくりたいのです。

私の話が、世界にいるすべてのジャパニーズ・フィリピノ・チルドレンの力になることを願っています。何かを望むのであれば、それをかなえるために、いっしょうけんめいに働き、耐え、ベストを尽くしてほしい。何よりも、私たちの気持ちを憎しみで支配すべきではありません。私たちは許すべきです。なぜなら私たちには、一生のうちで一人の母と一人の父しかいないのですから。

審査員賞/Special Recognition
Ken Ishikawa(原文 英語)

波に逆らう日々—JFC という私の人生
Constantly Breaking Against the Tide: My Life as a JFC

最近はあまりきかれることもなくなりましたが、もしきかれたらこう答えます。私の父は三船敏郎だと。

私は本当に三船敏郎が大好きです。特に、用心棒と三十郎のチャンバラ映画の三船敏郎が。彼の髭を真似たし、彼の寡黙さを真似ました。彼が口を開くのは、酒を飲んだ時か、誰かが助けを求めてきたり、剣の腕前を試したいと言ったりする時くらいです。

私は幼い頃、黒っぽい着物を着て田舎を旅して景色を見て、もし運が良ければ、出会う人たちの人生を変えたいと夢見ていたものです。世界を織りなすものを切り取り、きれいに修復できる人になりました。

今となっては、それらは幻想だったことがわかります。私の身体は糖尿病で弱っているし、私の精神も鍛え方が足りないのです。私は優しい口調で話し、剣の代わりにペンを持ちます。私たちの夢と現実はどうほど違うことか！私たちが持つファンタジーが、いかに現実の人生を教えてくれることか！

私は修行に邁進しようかとも思いましたが、時として私は、フィリピンにおいては生物学的な「外国人の子ども」としての特権に浸って優しく育てられました。私の母はカトリックの価値観で私を育ててくれました。つまり、人生は大きな十字架のようなもので、神は苦しむ人、それを寡黙のうちに耐える人に見返りを与えるのだと。

私たちはよく、私の実の父親であるヤスオ イシカワのために手を合わせて祈りました。父がいつも健康で、毎月私たちに生活費を送金してくれますようにと。私たちは、目に見えない神、離れていても常にそこにいる日本人の男性によって扶養されていたのです。

父が常にそこにいるというのは、母がいつも父のことや、もし父と別れなかったら私たちの生活がいかに楽だったかと話していたからです。父について、こんな話を聞くたびに、彼自身が神なのではないかと思いました。私たちは、父に電話しては、彼が苦勞して稼いだ日本円を送ってくれるよう頼んでいたのですから。

母と離れ離れになってから6年間もの間、父は毎年クリスマスになると必ず私たちにプレゼントを贈ってくれました。1回か2回、父が電話をかけてきてくれました。母は私に「お父さんにアイラブユーと英語で言いなさい」と言いました。母によると、私の父はよく本を読む人だったといいます。幼い頃、私は父のようになりたかったのです。だから、私は時間があれば本を読んで、将来は彼の会社で社員として働くという夢を持っていました。

父に会ったのは、後にも先にも、私が12歳の時でした。父はフィリピンで会社を経営していたので、よくフィリピンにやってきました。その時、私は父と背丈が並ぶようになっていて、父はかなり頭髪が薄くなっていました。父は私のために学資保険をかけてくれました。父は私に、「隣に座りなさい」と言いました。しかし私は胸がいっぱいで、どうすればよいのかわかりませんでした。恥ずかしさが先に立ち、私は愛する父の隣に座ることができず、また彼にかける言葉もありませんでした。

母によると、私が父のそばに寄らなかったのも、私が父を嫌悪していると父は誤解したそうです。父は二度と私に会うことはありませんでした。

時が経つと、父からの連絡は途切れがちになりました。私が悪かったのだと後悔しました。ふと手から離れた風船が空に飛んでいったように、父は私からどんどん遠ざかっていきました。私は彼がどのような人か知っていたわけではないのですが、その距離といまだ私が知りえていない父の人となりとが、次第に以前にもまして大きくなっていきました。

父は謎であり、影であり、幽霊でした。私には追い払えない妖怪です。そして私は本やテレビゲームといった娯楽の世界に逃げ込み

ました。父と会えず、彼をつかまえる夢はかなわず、日本につながる道が父だったことでそこにはたどり着けず、私は自分の無力さを感じました。

私は父を真似ようと思いました。私は父を喜ばせようとして、デラサール大学の経営学部に入學させました。私が父のことを大切に思っていると伝えたかったのです。父の会社で社員として働きたかったのです。父の注意を引こうと懸命にもがきながら、私はふと、自分の人生は何だったのだろうと考え始めました。私は父の息子なのに、父はなぜ私などいないかのように扱うのか。私は、自分の人生は偽りだと感じ始めました。自分は嘘の人生を生きていると思いました。

徐々に辛くなり、それまで大好きだったことにも関心が持てなくなりました。私の毎日に、黒いカーテンが降ろされたようでした。私は授業の単位を落とすようになり、ついには退學に追い込まれました。私は父の会社に電話をかけ、父と会わせてほしいと頼みました。会社のマネージャーが電話をとり、父は私を愛したこともなければ、息子だと思ったこともないと私に言いました。

ヤスオ イシカワは、実の息子に対して、「父子関係はもう何年も前に終わっている」と告げる勇気がなかったのです。

その頃は、私の人生で最悪の時期でした。しかし徐々に私は立ち直りました。私は6か月間、中国人が経営する印刷会社で働き、グリーティングカードに印刷するメッセージを書きました。2000年には、母はイスラエルへ出稼ぎに行きました。母は子守や家の掃除をする仕事に就きました。母は私の学費を稼いでくれました。私はジャーナリズムの勉強をして、自分の能力を詩に生かそうとライターズクラブに入りました。

詩と言葉を学び、私はイメージーションから新しい自由を得たような気がしました。そして父についての詩を書こうと思いつきました。

ヤスオ イシカワ

父はこんなふうに私の人生を描いた
アスファルトのような黒
いつも彼の幽霊がつきまとう
どの路を行っても果ては輝く
とらえどころがなく遠い

明確な地図はない
息をすればさらに遠くなるのがわかるだけ。
ここにくるまでに
私はあらゆる車とバスに乗ったが
ついに彼の靴音さえ聞くことはできない
銀色の、歩いている彼の姿
それが視界に入ったと思えば
雑踏にかき消される

それは私が車の後ろに乗っていた時
彼が歩道を歩いているのを見た
銀色の糸のように
私が振り向くとすでに時遅く
彼は雑踏の中に埋もれて見えなくなった

バー、ビル、人ごみ、街並みに紛れ
コンクリートと鉄の枠を超えて
増殖する人の波に逆らって私は歩く
どれほどの時を積み重ねたら克服できるだろう
街はクラクション、野次、削岩機などの
道具が出す音であふれ、私は驚く
そして私はどこかの島に座り込む
他に呼び名を思いつくこともなく

私自身。時として自分の脈を聞き、
過ぎ去る車から放たれ消えるエンジンの
音を待っている
私の身体に確かなものがあるのだろうか

私は街に立ちすくむ
その運賃は高かった

でもその出費は私の懐を深くした
彼が私を放り出した世界は、
彼がバッグに荷物を詰め込んだ時、
やがて血脈となり心臓に届いた

私が彼を見たのはほんのひとときだ
ホテルの中でスリッパを履いて新聞を読む姿
足をテーブルの上に載せて
あるいは私の頭の上を過ぎ去る飛行機の中で
スコッチを飲みながら
でも私にはわかる
その魂は私たちの手が届かないところにある

ありがとう、ヤスオさん
幽霊のように私にとりつくとは、良い父親だったよ

芸術を通じて、私は知らず知らずのうちに、私はまだ父を愛していると感じました。私の詩の先生によれば、この詩は、得難い愛について語っているといいます。私は自分が作りだした芸術によって、自分自身を癒すことができました。そしてついに、私は意味を見出すために前に進まねばならないと考えました。父との関係にある自分、そして私が所属する2つの文化の。

まもなく卒業という時期に、恋人から妊娠を告げられました。彼女は私に、この先結婚して一緒に子どもを育てるか、ここで別れて娘とは会わない人生を選ぶか、という2つの選択肢を突きつけました。かなり前に、私は自分に約束していました。自分に子どもができれば、父親がわからない人生を歩ませない、そして、父親が自分を愛していたと感じてほしいと。25歳になる頃、私は夫となり父となりました。振り返れば、私の妻と子が、この空虚な人生から私を救ってくれました。

私は幸せだったけれど、自分のアイデンティティと運命について

やはり疑問を持っていました。自分と同じような人生を送ってきた人でなければ、この疑問には答えられないでしょう。私はフィリピン人と日本人の血を引く人たちを訪ね歩きました。私は偶然にも DAWN 主催の第一回マニラ東京 JFC 国際会議へ代表者として派遣されました。その後、BATIS-YOGHI という JFC の青年グループに入りました。

私が衝撃を受けたのは、私たちのほとんどすべてが、同じ経験をしてきたということです。父に遺棄されたことで、私たちは日本国籍を得る手段を失いました。彼らもまた父親という幽霊から逃れようとし、最悪の状態から這い出そうとしているように見えました。JFC の多くが、恋に落ちると分別もなくはめをはずし、家族を持つにはまだ早いと言って関係を終わらせていました。私たちのなかには悪い習慣を持つ者もいます。女性関係にだらしない男が多いし、なかには「これが日本人だ」と、仕事潰けになる者もいます。

私は同じ物語を持つ人たちに会い、その現象に惹きつけられました。なぜ、このような自暴自棄が起きてきたのか、私はもっと調べたいと思いました。

2011年、私は研究計画書を書き、日本財団の研究員に応募しました。何かの奇跡が起きて、私は研究員に選ばれ、2012年から2013年7月までの1年間、日本に行く機会を得ました。

私は大阪を拠点に、東京、名古屋、静岡、仙台へ行き、JFC たちと話をしました。彼らは静かですが、とても勇敢に、固い決意をもって人生を送っていました。フィリピンの家族へ送金するため、ブルーカラーの工場労働をする者もいれば、エンターテイナーとして働く者もいました。まだ学生の子どもたちは（彼らが）外見が異なり、違う文化をもつという理由で、学校でいじめられていました。15歳以上の若者たちはすでに年齢が超過していることを理由に学校教育を受けられないでいました。

かつて私の母と日本のメディアは、私に日本を幻想のように見せていたのですが、私は自分の目でありのままの日本を見ました。私は不快な現実気づかざるをえませんでした。調査旅行終了後は、数か月間、落ち込みました。私の故郷は私を拒否したのだと。

本当のことを言えば、私は三船敏郎を父親だと言いながら、いや実は本当の父親はイシカワなのですが、私の本当の父親は日本だと思います。なぜ日本政府は適切な時期に介入せず、私たちに日本国籍を失わせたのでしょうか。私たちの実の両親がそれをできなかったならば、国家が介入して子どもを守るべきだと思います。

辛口かもしれないけれど、日本と私はまだ終わっていないと思います。今のところは「しかたがないな」と言うしかありません。そして、自分の傷が癒え、強くなるのを待つしかないのです。

結局、私は「浪人」なのです。波のような男、そして陸の形がかわるまで、波は何度も何度も海岸にぶちあたるのです。

Nihon,ni watashi wa kaerimasu!

日本に、私は、帰ります！

ベストエッセイスト賞/Best Essayist Prize

Ami Hasunuma(原文 英語)

私の人生はまさに月のようです。それはなぜでしょう？ 月は太陽の光を借りて輝きます。私も神様や私の周りの人の力に助けられています。その光は、私を完全に輝かせるかもしれないし、4分の1、もしくは半分くらい輝かせているのかもしれませんが、月の4分の1か2分の1かもしれませんが、月のように、この光が私を輝かせます。月は、完璧な美しい存在に見えます。しかし近づいてみると、ちがうのです。それはまるで私のようです。

誰もがそうであるように、私もまったくもって完全な人間ではありません。そして彼（神）が言うようにだれもが完全ではありません。一方で月は、私の夢の象徴です。ネイル・アームストロングは月にたどり着いた人間です。夢はとても遠くに感じ、実現不可能に思えるかもしれませんが、でもアームストロングは教えてくれました。前進を続けている限り、遠すぎる夢はないのだと。

月は悲しみと暗い夜のシンボルとして使われます。月が夜を照らしてくれるのだと、気づく人はあまりいません。私もいつか、月のように闇の中にいるだれかを照らしてあげたい。希望を与え、他人を助けてあげたいのです。

私は私立の学校で勉強し、いつの日か医者になることを夢んでいます。私は、祖父母が所有する、まずまずの家に住んでいます。両親は別れてしまいましたが、私の母は一生懸命に私を育ててくれたと誇りを持って言うことができます。でも、それだけではすまないことがありました。私もたくさんの困難に直面しました。ご存じのように、ジャパニーズ・フィリピン・チルドレンの多くが、家庭崩壊、養育費の問題に直面し、そして十分に愛され、世話をしてもらうことなどにあこがれています。私達のような子どもにとっては、人生は万華鏡ではないのです。「完全な人生などない」のです。

1997年の9月19日は、私の母にとって忘れられない日です。時が経ってもそう簡単に忘れられるものではありません。母と父はその年に結婚しました。私が生まれることは、うれしいと彼らはいいました。しかし、そうだったのでしょか？ 私が3歳までは父の顔

を見ることができたのは十分幸せだったといえます。彼は私を助け、必要なものを与えてくれました。しかし、それが父に会えた最後のチャンスだったとその時には誰がわかるというのでしょうか？ でも、よいのです。私は少しの期間だったにしても完璧な家族を経験できたのですから恵まれていると思います。父親がいる、という気持ちは体験できたと思います。

父と一緒にいてくれたときの記憶は、私にはありません。それは私が幼すぎたためかもしれません。父がいないので、私を形成するパズルがまだ完成していないように私は感じます。でも、私の周りの人々が、私のかけた部分を埋めてくれました。私の関心が「持っていないもの」ではなく、「持っているもの」に目を向けるようにしてくれました。彼らは決して私が孤独な戦いの中にいる、と感じないようにしてくれました。彼らは私に送られた恵みであり、私が欲するよりも多くを私に与えてくれたのです。

そのおかげで、私はそれ以上を求めることはありませんでした。クラスメイト、親友、そしてとくに母、祖父母に感謝しています。そこに完全な本物の望ましい幸せがあると感じます。

父は私たちと一緒にいなかったけれども、私に養育費を送ってくれました。そして勉強をはじめることができました。私は、ダバオ・プレシャス・チャイルド・アカデミー（現在は、プレシャス・インターナショナルスクール・オブ・ダバオ）で勉強をはじめました。

私は、小学生のとき、校長先生が選ぶ優秀な生徒に選出され、クラスのトップ3に入っていました。ところが4年生になったとき、とつぜんの嵐のようなできごとが起こりました。私の愛する父が送金をやめてしまったのです。母は、仕事がなく、持っていた宝石のほとんどを質屋に持っていったり、持ち物を売ったり、貯金を切り崩したりして、その学年を修了させてくれました。

インターナショナルスクールの学費は高額です。とつぜん放り出された私たちは、試練と中傷に耐えなければなりません。母が、売り払ったものをどれだけ大切にしていたか、私は知っていました。しかし、悲しいことに手元に残ったのは、わずか1個か2個でした。

私は家の近くのより学費の安い学校に転校させられました。初めのうち、この学校へ移りたくありませんでした。すべては突然のことで、適応するのは大変なことでしたし、以前にいた学校よりもずっと大きな学校でしたから。5年生になるまで、私がなぜその学校に移らなければならなかったのか、理由をはっきりと知りませんでした。それがはっきりとわかったのは、私の両親が離婚を決意した時でした。

その後、私は、母が経済的に苦勞していることを知りました。母は、私によく説明したうえで、大丈夫かと私にたずねました。それについて考えることは容易ではありませんでしたが、(私は)学校に通い続けました。しかし、時間が経過するにつれて、私はそれを受け入れなければならないのだと理解しました。そこがいやでも他に行く場所はないのですから。私は同級生と仲良くし、その学校で楽しいときを過ごしました。

私は、3番目に優秀な生徒としてのメダルを首にかけてもらい、小学校を卒業しました。

私は、同じ系列のハイスクールに進み、優秀な生徒のクラスに入り、勉強しました。そのクラスで4年間学べたことは成績以上の意味がありました。

神様からの恵だと思いますが、私はそのクラスのなかでもうひとつの家族を見つけました。その家族がもたらす喜びが、私の悲しみを埋めてくれました。

私は、成長するとともに、より創造的な人間になりました。私は、問題を抱えているからといってたばこや飲酒、ドラッグといった不良行為に走らなかった自分を誇りに思っています。

かわりに、私は自分を人道的な活動に向かわせ、ほかの人たちがよい将来を手にするよう、励ます側に回りました。そうした活動をボランティアで行いました。活動の範囲は、学校や自分たちのコミュニティだけでなく、市全体にまで広がりました。

私は、現在ダバオ市赤十字青年部のリーダーシップ開発プログラムのインストラクターをつとめています。そのかわり、私は、さらに公立学校で、公教要理(訳注:カトリック教会が入門者向けに開く教室で、問答集を使ってキリスト教について学んでいく。)を教えたり、教会や、学生たちのために、奉仕活動を行ったりしまし

た。校内新聞に記事を書いたり、学校で開かれる様々なセミナーに参加したり、近くの学校にも出かけていきました。またハイスクール時代は、国民の軍事訓練へも参加もしました。こうした体験によって、私は自分がより良い人間になることが出来ると感じるようになりました。嵐のような出来事が起こってもです。マハトマ・ガンジーは、こう言っています。「あなたが世界を変えたかったら、自分が変わらなさい」。

その一方で、他の人々を支援しつづけることは、実際、簡単ではありません。私がそれを簡単にやってのけてしまうように見ている人もいます。でも、そういった人たちは、私がどんな人生を歩んできたかを知りません。私自身も、自分の人生に悩み苦しんできました。全てを手に入れることは出来ません。私は勉強を続けることを止めようかという瀬戸際までできていました。最善を尽くしても何も報われませんでした。最終学年のプレッシャーに加え、友人や家族との間に問題があったからでした。ただ朝起きて、学校へ行き、一生懸命に勉強して、でも目標に達しない、忙しさゆえ友人と過ごす時間もない、混沌の中にいるため無気力に家に帰りただ互いに顔を見つめるしかない、こんな生活をどうぞ想像してみてください。さらに悪いことには、常に背負っていなければならないその重荷についても誰にも打ち明けることが出来ないのです。他に選択肢はなく、自分の中でそれを埋め、忘れ、殺してしまうしかないのです。しかしそんな苦闘の後でさえ、人生をよく生きるということは素晴らしいことであると考えようではありませんか。

私はまた、私自身や家族と周りの人々のための夢を持っています。私は、いつもコミュニティを支える仕事がしたいと思っています。

私は医者になって、自分の家を持ち、幸せな家族を持ちたいと思っています。家族には私が抱えてきたような思いはさせたくないと思います。

とりわけ、私の夢のひとつは、母としてときには父として、すべてを私のために犠牲にしてきた、母に恩返しをすることです。

私の夢の背後には、美しい心を持った母がいるのです。母は、完全な人間ではないかもしれませんが。しかし母はとても率直で、なおかつとても綺麗で多くの人をひく人で、大切な人です。この国

で子どもを育てることは確かに困難です。その特別な仕事をしてきた母に私は敬意を抱いています。

何か足りないからといって、すぐれた人物にはなれないということはありません。私のようなジャパニーズ・フィリピーノには、ただ乗り越えようとする意思と、そして母からの適切な教え、仲間からの励ましが必要なのです。そして、追いつめるような人々は、相手にしないことです。そして、幸福と満足を力に変えること、それが、成功につながる公式です。それに最後まで自分で取り組んでください。そうすれば、あなたのあるべき姿にたどりつくでしょう。あなたがこうだと思える自分、自身をよくわかっている自分でいられるのです。

私のこの話は、一度ねじれた私の人生をどのように、立て直したかという話です。しかし、私はまだここにいます。ジャパニーズ・フィリピーノとして生きることは楽なことではありません。

自分の状況を受け入れて、かつ誘惑に打ち勝ち、人生のあらゆる試練を乗り越え、良い人間になるには、たくさんの勇気が必要です。また、私は、それがジャパニーズ・フィリピーノとなるために大事なものではないかと思えます。皆が言うように、強くなるのが唯一の選択肢でなかったら、自分がどれだけ強いのか決して知ることはないでしょう。神は、私たちをより強い人間にするために試練を与えているのだと信じます。そしてもっとも強い人にはさらなる試練を与えます。

私たちが経験した試練は、私たちを強く、すぐれた人間にするための神からの密かな祝福だと言おうではありませんか。問題から目をそむけるのはやめましょう。起き上がり、立ち上がりましょう！

架け橋賞/Cross Cultural Leadership Prize

Saki Tanaka (原文英語)

My Life as a Japanese-Filipino Child: Best of Both Worlds

My name is Saki Tanaka. For the past twenty six years being both Japanese and Filipino has made my life an interesting journey. Therefore, I hope to share my experiences with other Japanese-Filipino children in Japan to serve as an inspiration and lesson for them to learn to love and respect themselves, their cultural uniqueness, and their contribution in Japanese and Philippine society.

My Cultural Heritage

Being half-Japanese and half-Filipino provided me with an interesting cultural heritage. It all began when love blossomed between my father, Shigetoshi Tanaka, who is a Japanese, and my mother, Juliet Raquel, who is a Filipino citizen. Music had brought them both together at that time: she was a professional singer in clubs and karaoke bars while he was a Jazz trumpet player of a famous band called "The Drifters".

Since both come from very different cultural and religious backgrounds, many cultural obstacles came along the way. My mother, upholding her Filipino values of being demure and conservative, did not discourage his intentions but she had a hard time dealing with her future in-laws because of her line of work and stereotype Filipinos. When she returned to the Philippines, my father followed her to prove his love, not only to her but also to her whole family! Against all odds, it was only their undying love for each other that made them weather all the storms that came along their way. In time, their love resulted to marriage.

Life at Home While Growing Up

Through their marriage, they were gifted with four children with me as the eldest. There were also cultural compromises and decisions that impacted our growth. By then, my mother has already adjusted to Japanese culture, converted to Buddhism, and adopted the customs and beliefs of the Japanese.

When my mother talks to my father, she uses Japanese, but when she talks to us it is in Tagalog and Japanese. My father tries to use Japanese as much as possible because he wanted us to learn decent Japanese so that we could lead happy lives in Japan. He would also cook Japanese food at home, which shaped my preference for Japanese dishes. He once told me,

“Cooking is like a battle! Food should be served hot and fresh so it won’t lose its original taste. But most importantly, you should give all your heart into it. That’s my greatest secret recipe!” Besides being a good cook, he is also a disciplinarian, like a samurai teaching us a lesson. One example is saying “Itadakimasu” before a meal and “Gochiso-sama deshita” after a meal as a way of expressing gratitude for our food.

My mother is a typical Filipina. For her, the family is the primary concern. My mother is cheerful and easy to talk to. She is permissive. Sometimes, my father complains to my mother, saying, “Don’t keep your mouth open during the meal,” “Don’t be slow in doing things,” and so on. My mother is “small but terrible,” meaning she is small physically, but she has power. On the other hand, she is always worrying about something. She always says, “Don’t wash your face immediately after you get home,” because of her belief in "pasma" or folk illness.

If I appreciate Japanese culture in terms of discipline, responsibility, work ethics, and food, I appreciate Filipino culture with regards to hospitality, care extended to the elderly, family-orientation, creativity and flexibility, and the equal treatment of the sexes. In Japan, boys are treated as superiors and I don't share that view, particularly now that there is discrimination in jobs too.

Striving to Aim Higher in Between Two Cultures

I had experienced difficulty immersing in both worlds at a very young age. I was just like the Sakura that wilts a few days after being drenched in spring rain. Yet true to my name, my experience as a cross-culture child was blessed with love and had made me blossom during the hard times.

When my father injured his fingers in an accident and could no longer play the trumpet, he gave up his career in music and established a construction firm in the Philippines. When my father started this new business, the whole family moved to Manila in the Philippines when I was three years old.

I was in fourth grade in the Philippines when an incident happened that would change the course of our life and my father's perception of Filipinos. On that day, I arrived home from school when I saw policemen carting away our electric appliances, watches, jewelry and other valuables. I was too young to fully comprehend the whole situation although I knew that there was trouble at home. Dad was falsely accused by some of his unfaithful employees. He was sent to jail and spent a few months inside.

Concerned for our safety, our parents decided to move me and my

two siblings back to Japan. Because of our business and for the sake of our staff members and their families, my mother decided to stay put in the Philippines and to give birth to our baby brother, Munetoshi.

It was an agonizing separation, and I was in another country with my father as a twelve year-old helpless girl. This period in my life would eventually influence my perception of my Filipino-Japanese heritage. After all, I had spent my childhood in the Philippines, I needed to adapt to Japanese culture, and life style.

Attending junior and high school in Japan was a period of major adjustment for me. At first, I was a popular student at school because I was a rare person from another culture they were not familiar with. I remember being bullied in school by the popular girls because of my different Japanese accent. I couldn't blame them because whenever I recite and read in class, I would pronounce something wrong because there are many ways of pronouncing Kanji or Chinese characters. I intentionally did not behave like other Japanese and spoke in English as well, and I did not apologize according to the Japanese custom. They would treat me as *gaijin* (short for *gaikokujin*), which means "foreigner" even though I looked Japanese. Because they called me by an offensive name, I would often cry alone and eat lunch by myself. My obento, cooked by my father, became my comfort food because it was a form of his love. It always saved my day all throughout my entire middle and high school life.

But one day, I found out that I could overcome my fear of being intimidated, that is, through music. While having our school lunch, I thought of making a song for my classmates who didn't drink their milk. I used a theme song of a famous anime called *Inuyasha* sung by a well-known Korean singer named BOA. This song, which I improvised, was called "Every heart - Minna no Kimochi" or "Every heart - Everyone's Feelings". When I shared my version with my classmates, they were moved by the lyrics: "Megu megu miruku wa oishii yo, nondara kitto tsuyoko nareru yo (Meg milk is delicious, if you drink it you'll grow stronger)." I was so happy because not only were my classmates able to drink milk, but they also learned I could sing beautifully too. Whenever there was a school trip, they made me sing. The popular girls who bullied me before became friendly and accepted me in their circle. From then on, my passion for singing, which I inherited from my parents, made me accepted at school.

Because of my experience, I tried my best in all my endeavors: I studied the Japanese language intensively, I applied for various speech and essay contests, I wrote my life story which was published in a small book, I was a good teacher to my younger sisters in their studies, and I did well in

my studies. My inspiration was my father who kept criticizing me about my overall ability, so I showed him my real ability and he was proud of me.

But that didn't stop me from inspiring to aim higher: After graduating high school, I worked for a cosmetic company as an assembly line employee working eight hours a day on weekends and an employee at a burger restaurant. With my savings from these two jobs, I studied at a two-year college with a low tuition fee that I could afford. There, I was given an English teacher's license and I was elected president of the student council. I worked hard to improve my Japanese and I made every effort to make good grades at college.

I got a job after finishing college but I was not interested in my work because I had wanted to get a job related to interpersonal services. So aspiring to achieve higher, I took an entrance exam to a University in the Philippines and passed.

I decided to become a student again, this time as an Elementary Education student with a major in English. It was not that difficult for me to fit in because I already grew accustomed to Filipino culture and my mother's family was there. However, in the second year at the university, I suspended my studies because of my economic situation. I returned to Japan and worked as an assistant teacher at a high school while I took online courses at the university in the Philippines. I graduated last 2013 with a degree, and since then I have returned to Japan to pursue a career, and to support my parents.

Words of Encouragement for Fellow JFCs

When people ask me, "Which do you consider your home, Japan or Philippines?" I cannot tell which of them my real home is. I feel at home as long as my family is there. Japan is where I was born and currently work, but Philippines is also my country because I do not feel different from the Filipinos. Now I've grown up, and I am in a situation where I can go and come to the two countries whenever I want. Furthermore, I also have a network of friends from both countries.

For those like me who have to constantly negotiate their cultural identity, it is important to accept oneself as part of two worlds. Even though our experiences are different from the rest, there is no need to sacrifice self-respect and belief in oneself. For fellow JFCs, learn how to love yourself and your cultural origins because no one can judge you better than yourself; and if life gives you obstacles, there is no reason to give up. Lastly, you can earn the respect of others if you work hard to become a better version of yourself. As they say, "Be the change that you wish to see

in the world," and that includes taking the best from both worlds.

JFC ネットワーク賞/JFC Network Prize

Kenji B. Yutani (原文 英語)

“It is not flesh and blood but the heart, which makes us fathers and sons.” - Johann Schiller

My story started in countryside in The Philippines, where my Mother and Father decided to have a vacation. I grew up in Calampong Virac, Catanduanes, in which I was nourished with love and values by my Grandmother, Grandfather, Aunties, Uncles and other relatives.

I wasn't raised in a usual way parents would rear their child. At one point in time, I asked my grandmother, “Where is Papa? Why is it that my classmates were fetched by their Fathers after school, while in my case, you and grandfather were always with me after school?” She told me that Mama and Papa have to work in Japan to give me a good life, for them to send money so that I can go to school.

I believed with what my grandmother told me and so I never asked again. As I grew up, my family couldn't hide the fact anymore from me. I asked them again about Papa. Since, Mama's always coming home for my birthday, Recognition Day, and Graduation Ceremonies as well. They told me that Papa abandoned me 2 months after I was born in The Philippines. In all honesty, I wasn't hurt because I am very contented with the love that I get from Mama and especially from my Grandmother and Grandfather. I lived as if nobody's missing in my life, but deep inside I have this feeling that someday I would love to meet the man who gave me life.

I grew up seeing myself different and special in some ways. I studied at Virac Pilot Elementary School, a public school. My classmates always told me that I looked different and I always tell them that I am half Japanese. My classmates and my teachers always say that I am rich. During that time, at the back of my mind, I always thought that they don't know that they're richer than me because they have their fathers and that they have a complete family—something that a normal child would love to have.

I finished my secondary education at Catanduanes State Colleges Laboratory High School, a government-run school. Then, I moved to Manila because I was admitted at Far Eastern University. Having the Japanese features didn't give me any advantage when I was in Metro

Manila which is one of most industrialized cities in my country. I was prone as victim of crime, like snatching, and kidnapping. So when I was there I had to be very careful whenever I was alone or I was riding the public transport around the metro.

Back on the first day of college, teachers and students had to introduce themselves in front of the class to get to know each other more. I was always asked after I introduced myself, “Why do you have small eyes? Why do you have a different name? Are you Japanese?” I always tell them that I am a half Japanese and my father abandoned me. Then, a moment of silence would follow as soon as I told them my story.

At first, I was against the idea of my Mama re-marrying someone. Of course, I have dreamed that my Mama and Papa would have another chance and that we will be complete again, just like a typical family. But, it's my Mama's happiness and not mine, so I let her marry my Stepfather in 2005. After all, I want someone to take care of Mama and I don't want her to be sad. I thought that my stepfather would treat me differently but it was the other way around. He stood up for me, gave me clothing, helped my Mama to send me to a prestigious school, and most importantly, loved me like his own son from his own flesh and blood. I will be forever grateful to him, I know that it takes so much courage to accept and love someone who's not even blood-related to him. I call him “Daddy”.

I finished college and my Alma Mater awarded me Magna Cum Laude, meaning “with great honor” or the second best student who took up Bachelor of Science in Commerce Major in Tourism Management. I was thankful to God for guiding me and to my parents for supporting me all the way. They've inspired me to do my best in every examination that I took at University. I have proven to everyone that having a broken family is not an obstacle to become a successful person; rather it should be an inspiration to do more and to give more.

After my graduation, I looked forward to working in the Tourism industry. Suddenly, I woke up and realized that I want to see the land of the rising sun---Japan. I had the feeling that I wanted to see my father, I wanted to hug him and meet him. It was a tough decision since I had to leave The Philippines and a good job that might await me. Mama and Daddy agreed with me and immediately processed my visa. Luckily, the Japanese Government gave me permission to stay in Japan for 3 months. I had that

hope that I will find Papa in a span of 3 months.

The first time I set my foot in Japan I was mesmerized by how it's really different from the country where I grew up. The people look like me, they also have small eyes. I thought it would be easy for me to adjust, but I found it rather uneasy at first. I had to stay at a small apartment in Tokyo with Mama and Daddy. It's so hard to adjust since Daddy has the attitude of a traditional Japanese man. I had to change everything, from greeting, how to get food, how to ride the train, when to sleep, when to wake up, and even how to value time.

The most difficult part of staying here was I didn't know how to speak Japanese at all. I came here without the basic knowledge of the Japanese Language. I couldn't understand the people on the train, in the supermarket, and the entertainers on the television. It was frustrating as well as stressful for a first timer like me.

When my permission to stay here in Japan was about to end, Mama and I became so stressed because we didn't know what to do. Luckily, with the help of the Internet, I discovered The Citizen's Network for Japanese-Filipino Children Inc.. They immediately conducted an interview and started searching for my biological Father. It was a difficult moment because we had to recall everything that happened in the past for them to know my real story.

While searching for my father, JFC Network helped me obtain the One (1) Year Child of Japanese National Visa from the Ministry of Justice in Japan. At that time, I felt so happy and blessed because at least I was able to get a part of my rights here in Japan. Though, it's a little painful, because I knew from the start that the government can grant me Japanese Nationality but because I came here too late my case was then called "A Lost Japanese Nationality".

Since the government granted my visa, having a job would be already legal. And so, I started searching for a job here with the help of some people from the Filipino Community here in Shinagawa. Fortunately, someone referred to a Wine Factory. I knew that it would be difficult for me since I really don't have experience having a blue collar job. It was my first day and I saw how many boxes of wine I would lift that time. Weighing 21 kilograms each, I had to put the boxes on the conveyor in a

very fast manner. In addition to that, my boss didn't treat me well. He called me "Debu" or obese, instead of my name. It was a horrible experience to be bullied and harassed because of my weight. I stood strong despite having difficulty in task and in language but deep inside I wanted to cry and give up. What I was always thinking that time was I had to endure this until I would find my Father. Unfortunately, after 14 days of working I was fired by the supervisor. He fired me just because I am a Filipino and he didn't want to work with Filipinos. I felt discriminated. After that, I immediately moved on and found another job. This time, it's a Laundry Shop where all employees were Filipinos, it was also tough but at least, I wasn't discriminated at all.

In the middle of March of 2013, JFC Network called me and finally gave me the good news. They had already found my papa. Finally, after 7 months of waiting I would be able to see him. But, there was also bad news, they told me that there's a possibility that he would become blind in the near future so he wanted to see me as soon as possible. That time, I cried because my journey in search of my father would finally come to an end, but I hoped that my father would still be able to see me with his own eyes. I prayed to God that he would still give us the opportunity to meet. Along with a JFC Network's staff, I went to father's place. That time, I didn't know what I was feeling. I didn't know if I was excited, nervous or happy. I didn't know what my father's reaction would be. After 5 hours of travel, we finally arrived at his place where my father was waiting for me. At the station I saw a man coming and checking the name of the JFC Network's staff. As soon as he confirmed that we were the people that he was waiting for, he immediately embraced me and said "Gomen ne, gomen, gomen!" It was one of the most unforgettable days of my life. I couldn't believe that I was already embracing the man whom I owe my life.

We celebrated his 50th birthday together in his place. The first time we had a dinner, I cried a river. After a long time of abandoning me and not giving me support, I was finally having a hearty dinner prepared by my father. That's enough for me to feel his love. We had a quality time there and I tried entering a "Sentou" or a public bath. Inside the public bath papa was explaining to me that all these years, he did not forget me and he was longing to see me but he didn't know how and where to start. I did not ask for an explanation because I just wanted to cherish the moment. I told him to forget those things and he also told me that we should start anew. That time, I wished that we will never be separated again.

I think that in life, we can't choose who our parents will be. We only have one choice, it's to love, respect and learn from them. Now, I am still here in Japan. I am already an English Conversation Teacher in one of the most famous Conversational schools here. I chose to stay here because I am still hoping that someday I can go back to his place and little by little papa and I will be able to fill the gap, to know more each other and to create more unforgettable memories.

I want my story to be an inspiration to all Japanese-Filipino Children all over the world. If you want something, you should work hard, be patient and do your best to achieve it. Most importantly, we shouldn't allow hatred to fill our hearts; we should learn how to forgive, because we only have one Mother and one Father in our lifetime.

審査員賞/Special Recognition

Ken Ishikawa(原文 英語)

波に逆らう日々—JFC という私の人生

Constantly Breaking Against the Tide: My Life as a JFC

No one asks me this question anymore these days but if anyone did, I'd tell them that my father is Toshiro Mifune.

I really, really love Mifune Toshiro. Especially the Mifune Toshiro I've seen in his chambara movies Yojimbo and Sanjuro. I've tried copying his beard, the brooding silence he carried which only broke whenever he drank a cup of sake or whenever someone interrupts his calm to either ask for help or to test his sword.

When I was younger I used to imagine wearing a dark kimono and traveling the countryside, hoping to see the sights and if I'm lucky, change the lives of everyone I meet. I wanted to become that someone who is able to cut the fabric of the world and restore good.

Now I know how much of an illusion that is. My body is unreliable due to diabetes and my will is undisciplined. I speak softly and in lieu of a sword, I have a pen. What wayward paths reality takes us from our dreams! How our fantasies tell us about our real lives!

As much as I had wanted for my hands to be calloused with training, sometimes I feel I have been raised soft, bathing in privilege as the biological offspring of a foreigner in the Philippines. My mother raised me on Catholic values, on acknowledging that life is a large cross to bear and that God rewards those who suffer and persevere in silence.

Most of the time, we clasp our hands together to pray that my biological father, Yasuo Ishikawa, remained in good health and that he wasn't remiss in sending us his monthly remittance for our living expenses. We were the dependents of an invisible God and a distant, yet ever-present Japanese man.

Ever present because my mother would not stop talking about him and how our lives would have been better if they had not separated. Sometimes

when I hear this talk about my father, I wondered if he wasn't some god himself – one we often call in order to continue sending us his hard-earned yen.

Up to six years after their separation, my father would still send us gifts every Christmas. He called the house once or twice. My mother told me to tell him “I love you” in English. She said my biological father was a well-read man and throughout my childhood, I wanted nothing more to be like him. So I read books as often as I could and dreamt of entering his business as his worker.

I saw him for the first time and the last time when I was twelve. He used to come a lot to the Philippines because he owned a business here. I was already as tall as he was by then and he has lost much of his hair. He was signing papers for an educational plan for me. He called me to sit beside him but I was too choked with emotion that I didn't know what to do. Shyness overtook me and I was never able to sit beside the father whom I loved but I had no words to tell him.

My mother told me that because I didn't go near him, he thought that I hated or disliked him. My father vowed to never see me again.

As the years went by, contact became few and far in between. I blamed myself for this.

He went farther and farther from me like a balloon that slipped from my hands. Although I didn't know him personally, the distance and his identity which I had yet to discover made him larger than life.

He became a mystery, a shadow, a ghost. A yokai that I could never exorcise. So chose to escape through distractions like books and video games. Not being able to see him, to catch the dream that is him, to never be able to cross over to Japan whose pathway is him made me feel powerless.

I tried to mould myself after him. I even took business management in De La Salle University in order to please him, to let him know that I thought of him in high regard. I wanted to work under him in his business. While I struggled to capture his attention, I began doubting the life I lived. If I was his son, why did he treat me like I was nothing? I felt that my life was a false life. I thought I was living a lie.

Slowly, bitterness crept in and I lost interest in the things that I used to love. A black curtain had fallen in my days. I accumulated failures in my subjects until I was eventually sent out of school due to all the black marks I collected. I called my father's office, wanting to talk to him. His manager picked up the phone and told me that my father never loved me or thought I was his son.

Yasuo Ishikawa never had the courage to tell his biological son that their relationship had ended a long time ago.

Those were the worst days of my life but I slowly picked myself up. I worked for a Chinese publishing company writing greeting cards for six months. By 2000, my mother migrated to Israel to work as a dekasegi. She mainly took care of babies and cleaned homes; she sent me to school but this time I studied Journalism and I joined a writer's club in order to hone my skills in poetry.

By studying poems and words, I felt that I had gained a new freedom through my imagination. I then thought of writing a poem for my father

Yasuo

This is how my father has drawn
life for me: asphalt black
with his ghost always there
the sheen at the end of each road,
elusive, ever distant.

There is no clear
cartography for this. Only the knowledge
that breath brings about further distances,
and all the cars and buses I've ridden
to come to this point, make me
no closer to hearing the sound of his shoes.
In a conspiracy of avenues and alleys
I thought I have seen in the corner
of my eye, the sliver of his figure
walking by. There are moments,
when seated at the back of a vehicle,
I see him in the sidewalk, becoming
Like a silver thread, I was too late

to grasp, lost among many.
In a blur of bars, buildings, people,
landscapes, I strain against the masses
that swell beyond their frames of concrete
and iron. What names could surmount
moments, the city astounds itself with horns,
catcalls, jackhammers and other sonic
appurtenances? So I sit down in an island
somewhere, with no other thing to call.
Myself. Occasionally to hear my pulse,
I wait for the sound of fading motors
from passing cars. What stillness I have
for a body, I lose in the streets.
The fare has been dear.

But the cost has only deepened
my pockets. This world he heaved on me
when he packed his bags has taken
its inroads and started becoming veins,
beaten paths to the heart. Whenever
I see him at tangents: in a hotel
reading the Shimbun with his slippers
on, his feet up the table, or on the plane
above my head, drinking scotch, I know
the soul is just another we could not touch.
Thank you, Yasuo-san.
Haunting me
is as good a fatherhood as any.

Through art I discovered that I still loved my father even if I didn't acknowledge it. My poetry teacher said that the poem spoke of a hard-won love. It was the first time that I was able to heal myself through my art. Finally, I thought, I had a way forward to make sense of things. Of who I am in relation to my father and the two cultures I belonged to.

While I was about to graduate, my girlfriend discovered that we were pregnant. She gave me an ultimatum to marry her and raise the child together or just separate and live a life without my daughter. A long time ago I promised myself that no child of mine will live not knowing who her father was and that her father loved her very much. When I turned 25, I was

already a husband and a father. Looking back, my wife and child had rescued me from a life of emptiness.

Although I was happy, I still had lingering questions about my identity and destiny. Who else to answer my questions but the people whose lives were like mine? I began looking for individuals who have Filipino and Japanese mixed roots. I chanced upon the Development and Action for Women Network or DAWN and they sent me as their representative to the 1st Manila Tokyo International Conference on the Japanese-Filipino Children (JFC). Afterwards, I joined a JFC youth group called BATIS-YOGHI.

What appalled me is that almost all of us have the same stories. Our fathers abandoned us and we have no way of claiming our Japanese nationalities. Sometimes I feel that they were also running from their own ghosts, escaping and clawing out of their own pits. A lot of the JFC recklessly throw themselves in abandon when they fall in love and suffice to say they end having families early. Some of us escape into vices. A lot of the boys womanize and some become workaholics thinking that it was their way of being Japanese.

Since I have been meeting individuals with the same kind of stories, I became intrigued at the phenomenon. I wanted to investigate the reasons why these abandonments have been happening.

In 2011, I wrote a proposal and pitched my research idea to a research fellowship funded by the Nippon Foundation. Through some miracle or the other I was selected as a research fellow and I was able to go to Japan for a year from July 2012 to July 2013.

I was based in Osaka and I traveled to Tokyo, Nagoya, Shizuoka and Sendai meeting and talking to JFC. They live such quiet but valiant lives, working blue collar jobs as factory workers or entertainers in order to support their families back home. Those who are still studying get bullied at school just because they looked different and they came from a different culture. Teens above 15 years old were refused schooling on the basis that they were too old to teach.

I began seeing Japan as it is and not through the fantasy that my mother and Japan's media sold me. It was a rude awakening. After my research trip was over, I became depressed for months thinking that my homeland rejected

me.

Truth be told, although I say that Mifune Toshiro is my father and although Yasuo Ishikawa is my actual father, I feel that my true father is Japan. Why does the Japanese government not intervene for us and make us lose our nationalities? When our biological parents fail, it is the state and the nation which should step in and take care of the child.

Although I may have been bitter, I feel that Japan and I aren't through. I just need to say *shikatajanai-na* for the meantime and let go until I heal and get stronger.

I am ronin after all. A wave-man and waves break and break against the shore until they change the face of the land.

Nihon, watashi no kaeru desu!

ベストエッセイスト賞/Best Essaysist Prize

Ami Hasunuma(原文 英語)

The moon is the perfect exemplification of my life. Why? A moon is known to borrow light from the sun. I borrow mine from God and those around me. This light may shine me wholly or maybe a quarter or two just as the moon. The moon looks as perfect as it is, but up close is the real thing. Just like me, I really am not perfect and as He said, nobody is. On the other hand, this very moon symbolizes my dreams. Neil Armstrong was one of those who reached moon. It may seem so far; your dreams yet impossible to reach. But Armstrong leaves us a lesson- that no dream is yet too far as long as you keep moving forward.

They say that the moon symbolizes sorrow and darkness at night. Little do people notice that the moon illuminates our night. Someday, I want to be like the moon- lighting up one's life that is in darkness, giving hope, serving others, and such.

I study in private schools and I dream of becoming a doctor one day. I live in a decent house owned by my grandparents, and although my parents are separated, I can proudly say I am raised well by my mother. But that doesn't stop there. I too, encounter many problems. You know, the typical problem of every Japanese- Filipino children- broken families, financial support problems, the longing for enough love and care, and the likes. It is never a kaleidoscope for children like us. *"No life is perfect"*, as they say.

19th of September, 1997 is not a date easily forgotten for my mother. Hours of labor sure is not easy. My mom and dad were married that same year. They say having me was a joy to the family. But, is it? Well then, I can say I am fortunate enough to see my father until I was three. He supported me, gave me my needs, and such. But who would've known that would be our last encounter? Yes, I consider myself blessed because even for awhile, I experienced having my family whole. I experienced the feeling of having a father.

I don't remember the things I've experienced when he was with me. Maybe it was because I was still young that time. Having no father figure would be an incomplete puzzle to one's being. But I would say that these special people around me covered up the incompleteness from within. These people diverted my attention to what I have than what I don't. They never let me feel that I am alone in this battle. These people are graces sent to me and they were more than what I've asked for. Because of the contentment I feel, I couldn't ask for more. And so I thank my classmates,

my best friends, and most especially my mother and my grandparents, for in them, I felt the completeness and true happiness that one could have ever wish.

Even my father wasn't here with us, he still continued to support me especially that I will start studying already. And so I started studying at Davao Precious Child Academy (presently Precious International School of Davao). I was a consistent part of the Principal's Lister and a part of the class top 3 in my grade school years. It was then when I reached grade 4 that the cloudburst of problems started. My dearest father stopped supporting us. My mother got no job and so almost all of her jewelry got pawned, her properties sold, and her savings spent just to let me finish that year. A year in an international school is justly costly and us being left on air and on our very own is challenging and derogatory as well. I know how much my mother value those things but it's sad to think that a piece or two is the only thing that's left.

I was transferred in a cheaper school near our house. I wasn't really in favor of transferring into this school at first. All of those were a sudden. It was a big adjustment for me because no wonder, it was a bigger school than the school I was in before. It wasn't really clear to me why I transferred until I was grade 5. That was the time when my mother and father decided to be divorced. Then I knew the struggles my mother got into financially. My mom explained this to me very well and asked me if it is okay. It wasn't easy to think of that and go to school all at the same time. But as time goes by, I realize that I should accept it because there is no point if I would be stuck in it. I got along with my peers and felt the real joy of being in that school. I graduated elementary with the 3rd honorable mention medallion hanging on my neck. I continued my high school years in that same institution and I was also a consistent student in the first section class. Being in that class for four consecutive years is beyond an achievement. It is a blessing indeed, because in them, I found a family and in those years were the joys that this family brings to cover up the sorrows from within.

I can say that as I grow up, I become more productive. I am proud to say that I am not one of those teenagers who become miserable because of problems- teens who smoke, drink, take illegal drugs, and the likes. Instead, I engage myself in humanitarian activities and encourage others to become more of the hope for our future. I do volunteering. Not just in our school, but also in the community and now, in the whole city. I am currently an Instructor for Leadership Development Program at the Davao City Red Cross Youth. Aside from this, I also do catechisms at public

schools, serve the church, serve the whole student body, write for our school paper, join various seminars in school and even in the national vicinity, and practice military discipline in our Citizen's Advancement Training during my high school years. These make me happy. These make me feel that I can be a better person despite the storms that came. Mahatma Gandhi once conceded, "*Be the change you want to see in the world.*"

At the same time, doing all these at fine besiege that help others is really not an easy task. Some may think that I take things easily. But they do not know the prologue of my story. I too, have struggles of my own. You can't have it all. I came to a point where I thought of giving up my studies. Why? Because it haunts me when I did my very best and yet it turns out to nothing. Maybe it was because of the pressure during my senior year plus my issues with my friends and my family. Could you just imagine just waking up, going to school, giving your best in your studies and not reaching your target, no peer time because of their busy schedules, going home pointlessly, and just staring each other at home because you're in chaos. And the worst thing is that you can't tell anybody about that heavy baggage you lift every single second. So you have no choice but to bury it, forget and let it kill you inside. But think, to live a well lived life is to be good even after the struggles you encounter.

I too, have dreams for the rest of my days- for me, for my family, and for the people around me. I have always wanted a work where in I can help the community. I have always dreamed of becoming a doctor, to have a house of my own, and a happy and whole family to whom I ensure them not to go through what I had.

Above all, a part of my dream is also to give back to my mother who has always been there for me, who sacrificed everything and stood as my mother and father at the same time. And so, behind these dreams is a mother with a pure heart. She may not be perfect but she is worth it, explicit, but extensively flamboyant. Raising a child in this state is difficult indeed. And I salute her for that exceptional job.

The lack of something is never a hindrance to be a fine person. A Japanese- Filipino child like me just needs the will to overcome, plus a proper guidance from a mother, multiplied by the inspiration you draw from your peers and a deaf ear to those who hound, rise to the power of happiness and contentment- then that would be the perfect formula to succeed. Divide it by yourself and in the end, it will always be ONE. It will always be YOU- you who will define yourself and you who know best of yourself.

So this is the story of how my life got twisted and turned upside

down. But here I am, still standing. Being a Japanese – Filipino isn't just a piece of cake. It takes great courage to accept your situation and overcome temptations and be a better person even beyond the trials in life. And I guess that's the gist of becoming a Japanese- Filipino. As they say, you'll never know how strong you are unless being strong is your only option. And I believe that God gives trials for us to be stronger and He gives more of those to who are the strongest. Let's just say that all these trials that I've been through is a blessing in disguise- a blessing that will inspire us to do better and will make you stronger. Let us not be cloistered in these problems. Rise and take your stand!